

# 動作主中心表現と事物中心表現 —身体部分を含む表現について —日中対照表現論（日→中）—

藤 田 昌 志

動作主中心表現と事物中心表現—关于把身体部分包括在内的表现  
—日中对照表现（日→中）—

FUJITA Masashi

## 【摘要】

一般的说起来，人们认为日语“成为”表现比较多，汉语“做”表现比较多。然而我们进行考察和分析很多日本现代文学作品和把它译成汉语的中译本，我们就了解不一定日语“成为”表现比较多，汉语“做”表现比较多。特别关于把身体部分包括在内的表现，我们可以说日语“做”表现比较多，汉语“成为”表现比较多。本稿调查日本现代文学作品和它的中译本（都是畅销书和畅销书作家的作品）进行考察和分析以上所说的问题。

キーワード：動作主中心表現 事物中心表現 転換（日→中） 主要なものとう  
でないもの（副次的なもの、少数のもの、例外的なもの等）

## 1. 序

日本語は「なる」表現が多く、中国語は「する」表現が多いように一般的には考えられている<sup>(1)</sup> ようである。たとえば「十日程すると丸山から呼出しの電話が掛かってきた。」→“过了十天之后，丸山挂来了传呼电话。”<sup>(2)</sup> などその例と考えられるが、日本現代文学の中国語訳作品を多く読んで日本語表現と中国語表現の対照を考察、分析していると、必ずしも日本語表現が「なる」表現が多く、対応する中国語表現が「する」表現になるとも言えない。むしろ身体部分を含む表現については日本語の方が「する」表現が多く、対応する中国語表現が「なる」表現が多いと言えるのではないだろうか。本研究の出発点はそうした素朴な疑問に端を発する。以下、日本現代文学作品とその中国語訳（いずれもベストセラーやベストセラー作家の作品）

を調べて、この問題について考察、分析してみたいと思う。日中対照表現論の事例研究である。以下、各論に移る。

## 2. 先行研究、着眼点等と研究方法について

拙著（2007）第四章 転換（日→中）について六、人（動作主）中心と事物中心では六一①事物中心（日）→人（動作主）中心（中）への転換、六一②人（動作主）中心（日）→事物中心（中）への転換<sup>(3)</sup>として、「する」表現と「なる」表現の中国語と日本語の関係について考察した。既述の「十日程すると丸山から呼出しの電話が掛かってきた。」→“过了十天之后，丸山挂来了传呼电话。”は六一①の例であるが、六一②の例としては「～初枝は赧くなった。」→“～初江的臉紅起来了。”「彼は～の住所をじっと見つめた。」→“他的眼光死死地盯着。”などの例を挙げた。本稿で扱うのは六一①や六一②といった表現の諸相であるが、身体部分を含む表現については六一①のような表現関係より六一②のような表現関係の方が多いと言える。これについては3で具体的に述べることにする。

以上の拙著（2007）の先行研究以外に、身体部分を含んだ中国語表現を「非言語コミュニケーション表現」の感情コードの面から具体的に記述した研究に奥田（1997）『中国人の非言語コミュニケーション』東方書店がある。（以下、奥田（1997）と略す。）奥田（1997）では第3章「中国人の「非言語コミュニケーション表現」とその感情コード—実際例を中心に」（p.75）として、その中の3.「感情コードを持つ「非言語コミュニケーション表現」の実際」（pp.81-132）で「中国語の「非言語コミュニケーション表現」の感情コードを「身体部位別」に項目をたて具体的に記述し<sup>(4)</sup>ていき、“头”“头发”“胡子”“眉毛”“眼睛”“鼻子”“嘴唇”“舌头”“肚子”“膝盖”などの身体部位についての記号的意味記述を行っている。たとえば“眼睛”を含む表現“瞪眼”（目を大きく見開く、睨む）は a.怒りの時（67。数字は収録例文数=出現回数を表す。以下同じ。）b.驚いたとき（20）c.焦っている時（4）という「非言語コミュニケーション表現」の感情コードを持つとし、それぞれ次のような例を挙げている。a.潘林气得一瞪眼，正要发言。〔战〕b.他会吓得瞪大眼睛，呆在那里掉了魂。c.战士们都急瞪两眼，呼呼地喘着粗气〔林〕<sup>(5)</sup>。これらの例のようにいつも a. “气得” b. “吓得” c. “急” のような表現があって理解の助けとなるとは限らないが、理解の助けとなる表現がある場合が多い。つまりは身体部分を含んだ、喜怒哀楽を表すステレオタイプの中国語表現となり、文学的に見れば、型にはまった手垢のついた表現ということになって、特に日本文学ではこうした表現を嫌うであろう。

それはともかく奥田（1997）の次のような表現例に注目したい。“眉毛”を含む表現として“皱眉毛（蹙毛）”（眉を寄せる、眉をしかめる）を挙げて a.怒りの時（7）b.焦りの時（4）

c. 心配している時 (2) d. 不愉快なさま (2) e. 困っているさま。 f. 精神的に辛い時。  
の例を提示しているが、a. 怒りの時の例として次のような例を挙げている。“她的漂亮的漆黑的眉毛还是皱着在一起，她的气还没有消尽。”〔暴〕<sup>(6)</sup>。これを日本語にすると次のようになる。「彼女はまだその美しい黒い眉をしかめていて、その怒りは収まっていなかった。」。筆者が動作主中心表現 (日) → 事物中心表現 (中) と呼ぶのは、このような日本語表現と中国語表現の関係のことである。日本文学作品の身体部分を含む表現がどのような中国語表現と対応するのか今回は直訳の対応がある場合ではなく、動作主中心表現 (日) → 事物中心表現 (中)、事物中心表現 (日) → 動作主中心表現 (中) に限定して考察してみたい。それが本稿の着眼点、考察個所である。(身体部分を含む表現がもっとも顕著に両言語表現の転換 (日→中) の特徴が現れるのでそのようにした。)

以下、3. では東野圭吾 (2001) 『悪意』、道尾秀介 (平成 20) 『向日葵の咲かない夏』、村上春樹 (2004) 『ノルウェイの森 (上)』、同 (2004) 『同 (下)』、田村裕 (2007) 『ホームレス中学生』 (いずれもベストセラー作品やベストセラー作家の作品) とそれらの中国語訳作品を資料として、身体部分を含む表現 (日) が①動作主中心表現 (日) → 事物中心表現 (中) ②事物中心表現 (日) → 動作主中心表現 (中) になる場合についてその諸相を考察していくことにする。本稿は理性的、理論的研究に対する、具体的事実の諸相を明らかにする事例研究のカテゴリーに含まれるものである。「理性」「理論」と「事実」両方の研究を行うことによって言語の研究は全きものになると考えられる。量的なものの順位、その表現の使用頻度など具体的事実を調べ、明らかにすることは、硬直的な「理性」「理論」偏重を是正する上で極めて重要な研究であると考えらる。

### 3. 動作主中心表現と事物中心表現

#### 3.0 動作主中心表現と事物中心表現—身体部分を含む表現について—

身体部分を含む動作主中心表現と事物中心表現は日本語と中国語で次のような関係が見られる。1. 動作主中心表現 (日) → 事物中心表現 (中) 2. 事物中心表現 (日) → 動作主中心表現 (中) である。3. 動作主中心表現 (日) = 動作主中心表現 (中)、事物中心表現 (日) = 事物中心表現 (中) については別途、考える必要がある。3. は直訳 (日→中) に属するものである。今回は対象外とする。(数としてはもっとも多い。) 今回の対象は 1. と 2. である。

### 3.1 東野圭吾 (2001)『悪意』(=『悪』)→ 姿美蓮 (2001)《恶意》(=《恶》)の場合

『悪意』→《恶意》では動作主中心表現と事物中心表現の関係はⅠ. 動作主中心表現(日)→事物中心表現が18例、Ⅱ. 事物中心表現(日)→動作主中心表現(中)が2例であった。身体部分を含む動作主中心表現、事物中心表現の身体部分別頻度数ランキングは次のようなものであった。

---

1.顔(Ⅰ.6例Ⅱ.0例 計6例) 2.目(Ⅰ.4例Ⅱ.1例 計5例) 3.手(Ⅰ.2例Ⅱ.0例 計2例) 4.指(Ⅰ.2例Ⅱ.0例 計2例) 5.頬(Ⅰ.1例Ⅱ.0例 計1例) 5.膝(Ⅰ.1例Ⅱ.0例 計1例) 5.肩(Ⅰ.1例Ⅱ.0例 計1例) 5.唇(Ⅰ.1例Ⅱ.0例 計1例) 5.左脇腹(Ⅰ.0例Ⅱ.1例 計1例)

---

Ⅱ. 事物中心表現(日)→動作主中心表現(中)は全体20例のうち、わずかに2例で、その他はすべてⅠ. 動作主中心表現(日)→事物中心表現18例であった。少ないほうから見えていくと、Ⅱ.の2例とは次のようなものである。「加賀刑事の目が大きく見開かれた。」(『悪』p.108)→“加賀睁大眼睛, ~”(《恶》p.81)、「彼が持った出刃包丁は、山岡の左脇腹に刺さった。」(『悪』p.325)→“他~, 掏出刀子刺向山冈的左下腹。”(《恶》p.239)。日本語の表現が「目」や「出刃包丁」という事物を中心として表現されているのに対して、中国語表現は“加賀”“他”といった人が主語となった動作主中心表現となっている<sup>(7)</sup>。しかし、そうしたⅡはわずか2例しかなく、その他の18例は次のようなⅠ. 動作主中心表現(日)→事物中心表現(中)である。以下、身体部分を含むⅠの表現を身体部分別に個別に具体的に見ていく。

Ⅰ-1.「顔」を含むⅠの表現例(6)(( )内の数字は用例数を表す。以下同じ。):「私の質問に、日高は顔をしかめて頷いた。」(『悪』p.11)→“日高眉头一皱, 点了点头。”(《恶》p.6)。(「顔」が“眉头”になるのはよく見受ける。),「加賀刑事は少し不審そうな顔をした。」(『悪』p.58)→“加贺的表情有一点疑惑。”(《恶》p.42)、「加賀君には私が顔を歪めたようにしか見えなかったかもしれない。」(『悪』p.90)→“~也许加贺只看到我的脸歪了。”(《恶》p.68)、「もう一つは」そういつて彼は私の顔に視線を戻した。」(『悪』p.106)→“其二, 他的视线移回我的脸上,”(《恶》p.79)、「私の質問に、篠田弓枝は少し心外そうな顔をした。」(『悪』p.160)→“我的问题让篠田弓江有些意外。”(《恶》p.119)、「彼女は白い顔ながら、(目の縁だけを赤くしていました。)」(『悪』p.217)→“他的脸色一片惨白, 只有眼眶红着。”(《恶》p.159)。日本語表現は主語として「人」を持ってくるのに対して、



中国語表現は“眉头”“表情”“脸”“视线”“问题”“脸色”を中心とした、(それらを提題化したと言ってもよい) 表現となっている。日本語には表現上、名詞のランキングがあること<sup>(8)</sup>、中国語にはそうしたランキングがなく“眉头”～“脸色”を主語の部分に持ってきて提題化することに制約がないことがこうした I. 動作主中心表現(日)→事物中心表現を多く生んでいるのではないかと考えられる。

I-2.「目」を含む I の表現例(4):「スタッフもレポーターも～、より劇的なシーンを撮ろうと、蛇のような目をあちこちに走らせているのが傍からもわかった。」(『悪』p.65)→“不过大家都心知肚明, 为了获得比较耸动的画面, 这些人的眼睛就像蛇一般四处扫视。”(『恶』pp.46-47)。この他「篠田弓枝は目を潤ませる気配を見せたが、～」(『悪』p.159)→“篠田弓江的眼睛有些湿润, ～”(『恶』p.118)、「彼女は(白い顔ながら)目の縁だけを赤くしていました。」(『悪』p.217)→“(她的脸色一片惨白), 只有眼眶红着。”(『恶』p.159)、「日高理恵は～、手記のコピーに目を落とした。」(『悪』p.262)→“日高理恵(露出～的表情), 眼光停在复印的手记上, ～。”(『恶』p.192)。やはり日本語の主語は「人」であるのに対して、中国語の主語は“眼睛”“眼眶”“眼光”といった「事物」である。

I-3.「手」(2)「指」(2)を含む I の表現例:まず「手」には次のような用例があった。「彼女は～、口元を両手で覆ったまま、～」(『悪』p.29)→“她～, 两手捂着嘴, ～”(『恶』p.20)、「私は手の震えを止められぬまま、～」(『悪』p.232)→“我的双手无法控制地颤抖着, ～”(『恶』p.169)。「指」を含むものは次のような用例である。「加賀刑事は～両手の指を組んだ。そして、両方の親指をくっつけたり、はなしたりした。」(『悪』p.73)→“加賀～, 十指交叠, 两个拇指一会儿合拢, 一会儿分开, ～”(『恶』p.52)。中国語表現では“两手”“双手”“十指”“拇指”が主語になることに何らの違和感もないようだ。

I-5.「頬」(1)「膝」(1)「肩」(1)「唇」(1)を含む表現例があった。「迫田警部はほんの少しだけ頬の肉をゆるめた」(『悪』p.32)→“迫田警部脸上的肌肉稍微松弛了一些。”(『恶』p.22)。「床に膝をつくと同時に」(『悪』p.29)→“(理恵)～, 就在膝盖碰到地板的同时, ～”(『恶』p.20)。「私は肩の力を抜いた。」(『悪』p.108)→“我的肩膀完全瘫软了。”(『恶』p.81)。「彼は相変わらず冷たい笑みを唇に滲ませていた。」(『悪』p.222)→“～, 他的嘴角依然挂着一抹冷笑, ～”(『恶』p.162)。同様に日本語は動作主の「人」が主語であるが、中国語は“肌肉”“膝盖”“肩膀”“嘴角”などの事物(=肉体部分)が主語や提題になっている。

### 3.2 道尾秀介(平成 21)『向日葵の咲かない夏』(=『向』)→王彤彤译(2009) 《向日葵不开的夏天》(=《向》)の場合

『向』→《向》ではⅠ. 動作主中心表現(日)→事物中心表現が 34 例、Ⅱ. 事物中心表現(日)→動作主中心表現(中)が 7 例であった。身体部分を含む動作主中心表現、事物中心表現の身体部分別頻度数ランキングは次のようなものである。

---

1.手(掌を含む)(Ⅰ.6 例Ⅱ.2 例 計 8 例) 2.身体(Ⅰ.6 例Ⅱ.0 例 計 6 例) 2.唇(Ⅰ.4 例Ⅱ.2 例 計 6 例) 4.眼(Ⅰ.4 例Ⅱ.0 例 計 4 例) 5.顔(Ⅰ.3 例Ⅱ.0 例 計 3 例) 6.口(Ⅰ.1 例Ⅱ.1 例 計 2 例) 6.足(Ⅰ.2 例Ⅱ.0 例 計 2 例) 6.眉(毛、間)(Ⅰ.2 例Ⅱ.0 例 計 2 例) 6.のど(仏)(Ⅰ.1 例Ⅱ.1 例 計 2 例) 10.姿(Ⅰ.0 例Ⅱ.1 例 計 1 例) 10.肩(Ⅰ.1 例Ⅱ.0 例 計 1 例) 10.頭(Ⅰ.1 例Ⅱ.0 例 計 1 例) 10.額(Ⅰ.1 例Ⅱ.0 例 計 1 例) 10.肘(Ⅰ.1 例Ⅱ.0 例 計 1 例)。

---

#### Ⅰ. 動作主中心表現(日)→事物中心表現(34)について。

Ⅰ-1. 「手」(掌を含む)を含むⅠの表現例(6)(Ⅰ.6 例Ⅱ.2 例 計 8 例):「(岩村先生は) 両手を僕に向け (ぶるぶると首を振る。)」(『向』 p.50) → “(岩村老师~,) 两手伸向我, (紧着摇头。)” (《向》 p.35)、「お母さんは、ぱんと音をさせて後ろの壁を<sup>てのひら</sup> 掌で打った。」 (『向』 p.54) → “妈妈的手掌啪的一声重重地砸在墙壁上。” (《向》 p.37)。その他として次のようなものがあつた。「手にしたスプーンを宙に止め、～」 (『向』 p.70) → “拿在手里的汤匙也停在半空。” (《向》 p.50)、「谷尾刑事は膝に手をあて、～」 (『向』 p.248) → “谷尾警官两手放在膝盖上、～” (《向》 p.183)、「岩村先生、けっこういろんなところに素手で触ってたもの。」 (『向』 p.121) → “岩本老师的手碰到了很多东西。” (《向》 p.87)、「～両手で自分の左右の頬を<sup>つか</sup> 掴む」 (『向』 p.455) → “～, 双手捂着自己的脸。” (《向》 p.333)。日本語の動作主中心表現は 6 例中、3 例が「(掌、素手、両手)で」と「手段」を表す表現で、対応する中国語の事物中心表現は“手掌”“手”“双手”を主題化、提題化したものとなっている。その他は「(両手、手にしたスプーン、手)を」(日)という目的語を“两手”“～汤匙”を主語化あるいは提題化した表現(中)にしている。

Ⅰ-2. 「身体」を含むⅠの表現例(6)(Ⅰ.6 例Ⅱ.0 例 計 6 例):6 例中、「身体」を「こわばらせる、固くする、硬くする」という「身体」を含む表現(日)が 3 例あつた。たとえば「美津江がぎくりと<sup>からだ</sup> 身体を硬くするのがわかつた。」(『向』 p.204) → “美津江看上去吃了一惊, 身体僵硬起来。” (《向》 p.149) といった例である。その他、「S 君は、僕に身体の正面を向けたまま、～」 (『向』 p.23) → “S 君的身体正面对着我, ～” (《向》 p.16) とい

った例もあった。中国語表現では身体部分は主語化、提題化が可能である。

I-2. 「唇」を含む I の表現例 (4) (I.4II.2 計 6 例): 「唇の端を持ち上げる」が 2 例、「唇を震わせる」が同じく 2 例であった。次はその例である。「お母さんは、唇の端を持ち上げた。」(『向』 p.40) → “妈妈～，嘴唇的两端向上挑着，” (《向》 p.28)、「お爺さんはきつく目を閉じて、唇を震わせた。」(『向』 p.356) → “老爷爷痛苦地闭上眼睛，嘴唇颤抖着。” (《向》 p.265)。

I-4. 「眼」を含む I の表現例 (4) (I.4 例II.0 例 計 4 例): 「～眼で」と「状態」としての「眼」の表現例が 3 例ある。ex.「お父さんは、血管の浮いた眼で真っ直ぐに僕を見ていた。」(『向』 p.456) → “爸爸～，布满血丝的双眼死死的盯着我。” (《向》 p.334)。

I-5. 「顔」を含む I の表現例 (3) (I.3 例II.0 例 計 3 例): 「(上体を起こし) 窓硝子に顔をつける」(『向』 p.10) → “(我站起身来，) 脸贴着窗玻璃。” (《向》 p.7)、「ものすごく怖い顔してさ。」(『向』 p.113) → “他的表情太恐怖了。” (《向》 p.82)、「顔を土にくっつけるようにして、～」(『向』 p.372) → “我的脸几乎要贴到地上了～，” (《向》 p.275)。中国語では身体部分の前に代名詞が来て、身体部分を修飾するのは普通のことである。

I-5. 「足」を含む I の表現例 (2) (I.2 例II.0 例 計 2 例): ex.「(注:僕は) 足に力が入らず、～」(『向』 p.267) → “(我～，) 双腿软绵绵的，～” (《向》 p.196)。

I-6. 「眉(毛、間)」を含む I の表現例 (2) (I.1II.1 計 2 例): 「岩村先生はずっと眉毛の両端を下げ、～」(『向』 p.12) → “岩村老师挑起的眉毛两端一下子放松下来，～” (《向》 pp.8-9)、「～、お爺さんは眉間に深い皺を刻む。」(『向』 p.362) → “(老爷爷～，眉间的皱纹加深了。)” (《向》 p.269)。日本語では「動作主の眉(毛、間)は～」という表現は好まれない。

I-6. 「のど(仏)」を含む I の表現例 (2) (I.1 例II.1 例 計 2 例): 「喉仏をぐり、と一回動かして」(『向』 p.214) → “～，老爷爷的喉结，“咕咚”动了一下，～” (《向》 p.159)。

I-8. 「肩」を含む I の表現例 (1) (I.1 例II.0 例 計 1 例): 「肩を震わせて」(『向』 p.394) → “双肩颤抖，～” (《向》 p.289)。I-8. 「頭」を含む I の表現例 (1) (I.1II.0 計 1 例): 「僕は～と頭の隅で考えていた。」(『向』 p.170) → “(我～，) 在脑际却迅速掠过一个念头” (《向》 p.122)。

I-8. 「額」を含む I の表現例 (1) (I.1 例II.0 例 計 1 例): 「谷尾刑事は額に深い皺を刻み～」(『向』 p.314) → “谷尾警官的额头上显露出一道深深的皱纹，” (《向》 p.229)。I-8. 「肘」を含む I の表現例 (1) (I.1II.0 計 1 例): 「(注:僕は) 窓枠に両肘をつき、～」(『向』 p.430) → “我两肘支在窗台上，～” (《向》 p.317)。

日本語はすべて動作主を主語にもってきている表現であるが、対応する中国語の事物中心表現は“双肩”“在脑际”“额头上”“两肘”を主語や場所語化する表現となっている。“我

两肘”はすでに見た“我两手”“我双手”などと同様に提題化したものとして同じグループにくくれるもののように思える。

## Ⅱ. 事物中心表現（日）→動作主中心表現（中）（7）について。

「唇」（2）「右手」（2）以外は「姿」「口」「のど」各1例である。「唇」を含むⅡの表現例（2）：「S君のお母さんの唇が、ずっと横に結ばれるのがわかった。」（『向』p.151）→“S君的妈妈紧紧的抿着嘴唇，～”（《向》p.109）、「やがて皺の寄った唇が、ゆつくりとひらき～」（『向』p.353）→“终于，他开启了干燥的嘴唇～”（《向》p.262）。Ⅰとは逆に日本語は肉体部分の「唇」が主語となり、対応する中国語表現は動作主中心表現となっているが、日本語はやはり翻訳調の日本語で、unmarked な表現ではないであろう。作家の新奇さを求める気持ちがこうした表現を生む理由であるように思われる。

「右手」を含むⅡの表現例（2）：「不意に、その右手が持ち上がり、壁のほうへと伸びる。」（『向』p.252）→“突然，他举起右手，伸向了墙壁。”（《向》p.186）、「ミチオの右手が泰造の目の前に差し出される。」（『向』p.416）→“道夫把右手伸到了泰造的眼前。”（《向》p.304）。「唇」と同様の例である。

「姿」「口」「のど」を含むⅡの表現例（各1例）：「（～と、）窓際にミカの姿があった。」（『向』p.171）→“在窗边看到了美香的身影。”（《向》p.123）、「口が勝手にそうつばや 呟いていた。」（『向』p.273）→“我无意识的自语道。”（《向》p.200）、「（注：お爺さんは）ぜいぜいとのど 咽喉が鳴っている。」（『向』p.148）→“老爷爷～，呼哧哧地喘着粗气。”（《向》pp.107-108）。（中国語は「ぜいぜいと（のどを鳴らして）息をしている」という意味の意識されたものであるが、事物中心表現（日）→動作主中心表現（中）であることに変わりはないので、Ⅱに含めた。）「姿」は肉体部分というより肉体全体であるが、対応する中国語は“看到”を使用しており、次のような表現例（肉体部分ではないが）と同様な例（事物中心表現（日）→動作主中心表現（中））として括れるものであろう。「今朝、S君が見つかった。」（『向』p.267）→“今天早上我们发现了S君的尸体。”（《向》p.196）。

### 3.3 村上春樹（2004）『ノルウェイの森』（上）（下）（＝『ノル』（上）（下））

#### →林少华译（2009）《挪威的森林》（＝《挪》）の場合

『ノル』（上）（下）→《挪》では身体部分を含む表現についてⅠ. 動作主中心表現（日）→事物中心表現（中）が10例、Ⅱ. 事物中心表現（日）→動作主中心表現（中）は0例であった。身体部分別頻度数ランキングは



---

1.体 (3 例) 2.手 (2 例) 3.肩 (1 例) 3.耳 (1 例) 3.目 (1 例) 3.顔 (1 例) 3.肩肘 (1 例)

---

であった。

1.「体」を含む I の表現例 (3) : 「(彼女はしばらく黙っていたが) やがて突然体を震わせて泣きはじめた。」(ノル』(上) p.232) → “((她沉默了半天,) 突然身体颤抖起来了, ~)” (《挪》p.148)、「(~,) 彼女は体を震わせてため息をついた。」(ノル』(下) p.288) → “~, 她身子一颤, 叹了口气。” (《挪》p.373)、「(レイコさんは~, 体を何度か小さく震わせていた。)」(ノル』(下) p.290) → “(玲子~,) 身子轻微地抖动了几下。” (《挪》p.374)。いずれも「体を震わせる」という動作中心表現(日)を“身体”“身子”が“颤”“颤”“抖动”(中)するという事物中心表現(中)にしている。

2.「手」を含む I の表現例 (2) : 「(僕は~) 両手で顔を覆い、~」(ノル』(上) p.8) → “~, 双手捂脸, ~” (《挪》p.3)、「彼女は両手を僕の肩にあてて~」(ノル』(上) p.16) → “她双手搭在我肩上, ~” (《挪》p.9)。3.2 で考察した“(我) 両肘”やその前に見た“(我) 両手”“(我) 双手”と同様に提題化した同じグループのものとして括れるものである。

3.「肩」「耳」「目」「顔」「肩肘」を含む I の表現例 (各 1) : 「緑はほんの少しだけくつと肩を動かしたけれど、~」(ノル』(上) p.163) → “绿子只是肩头稍微抖动了一下, ~” (《挪》p.104)、「(注:ウサギは) ~, 耳をびくびく震わせていた。」(ノル』(上) p.276) → “~, 两耳一斗一斗地直动。” (《挪》p.176)、「「一緒に死んでくれるの?」と緑は眼をかがやかせていった。」(ノル』(上) p.155) → ““和我一块儿死?” 绿子眼睛一亮。” (《挪》p.98)、「緑は顔を輝かせて、指をパチンと鳴らせた。」(ノル』(下) p.157) → “绿子满面生辉, 打个响指问:” (《挪》p.290)、「緑はカウンターに片肘をついて、僕の顔を見つめた。」(ノル』(下) p.49) → “绿子一直胳膊挂在台面上, 看着我的脸说:” (《挪》p.220)。

以上は、身体部分を含む表現における I 動作主中心表現(日)→事物中心表現(中)の例であるが、II 事物中心表現(日)→動作主中心表現(中)の例は身体部分を含む表現という制限を設けなくても以下のような例しかなかった。(正確には動作の受け手中心表現(中)である。)「僕の二十回目の誕生日の三日あとに直子から僕あての小包みが送られてきた。」(ノル』(下) p.178) → “过罢二十岁生日的第四天, 接到直子寄来的邮包, ~” (《挪》p.304)。

### 3.4 田村裕 (2007)『ホームレス中学生』(=『ホ』)→吴季花译 (2009) 《无家可归的中学生》(=《无家》)の場合

『ホ』→《无家》では身体部分についてⅠ. 動作主中心表現(日)→事物中心表現(中)が5例、Ⅱ. 事物中心表現(日)→動作主中心表現(中)が0例であった。身体部分別頻度数ランキングは

---

1.顔(面)(2例) 2.眉間(1例) 3.口(1例) 4.膝(1例)

---

であった。

1.「顔」を含むⅠの表現例(2):「(注:私は)そのとき二人がどんな顔をしていたか全く覚えていない。」(『ホ』p.8)→“我已经完全记不得当时他们两人脸上流露出什么样的表情,~”(《无家》p.5)、「~、高校のときに引きこもっていた川島が勇気を振り絞って顔面を硬直させながらも、(この日に初めてネタを下ろしてくれたこと、~)」(『ホ』p.181)→“在高中时代总是一个人躲起来的川岛鼓足勇气, 尽管脸部表情都僵硬了,~”(《无家》p.192)。“脸上”と場所語化したり“脸部表情”と主語化した例である。

2.「眉間」を含むⅠの表現例(1):「おじいちゃんは少し眉間にしわを寄せながら、~」(『ホ』p.51)→“伯父双眉微微蹙起,~”(《无家》p.51)。既述の“两手”“双手”“两肘”と同じグループの、提題化されたものの例である。

2.「口」を含むⅠの表現例(1):「おばちゃんは口が物凄く臭かったので、~」(『ホ』p.14)→“那位阿姨的口气非常臭,~”(《无家》p.14)。『ホ』→《无家》の例がⅠについて5例と他に作品と比べて極端に少ないのは直訳(日→中)を多用していることによるものと考えられる。

Ⅱ.事物中心表現(日)→動作主中心表現(中)には身体部分を含む表現という制限をはずせば、次のようなものがあつた。「お兄ちゃんとお姉ちゃんは行動を共にすることが決まり、~」(『ホ』p.9)→“哥哥姐姐决定要一起行动,~”(《无家》p.6)

### 3.5 3のまとめ

以上のことをまとめると以下の表ようになる。

	身体部分	『悪意』→ 《悪意》	『向』→《向》	『ノル森』→ 《挪威》	『ホ』→ 《无家》	合計
1	手（指、掌）	4 (4,0)	8 (6,2)	2 (2,0)	0	14
2	顔	6 (6,0)	3 (3,0)	1 (1,0)	2 (2,0)	12
3	唇（口）	1 (1,0)	唇 6 (4,2) 口 2 (1,1)	0	1 (1,0)	10
3	目／眼	5 (4,1)	4 (4,0)	1 (1,0)	0	10
5	体／身体	0	6 (6,0)	3 (3,0)	0	9
6	肩	1 (1,0)	1 (1,0)	1 (1,0)	0	3
6	眉（毛、間）	0	各 1 2 (2,0)	0	眉間 1 (1,0)	3
6	膝	1 (1,0)	0	1 (1,0)	1 (1,0)	3
9	肘	0	1 (1,0)	1 (1,0)	0	2
9	足	0	2 (2,0)	0	0	2
9	のど（仏）	0	2 (1,1)	0	0	2
9	姿	0	2 (1,1)	0	0	2
13	頬	1 (0,1)	0	0	0	1
13	頭	0	1 (1,0)	0	0	1
13	（左）脇腹	1 (0, 1)	0	0	0	1
13	額	0	1 (1,0)	0	0	1
合計		20 (17,3)	41 (34,7)	10 (10,0)	5 (5,0)	76 (66,10)

（ ）内の数字は（Ⅰの数,Ⅱの数）の内訳

『悪意』→《悪意》では「顔」を含む表現がⅠ.動作主中心表現（日）→事物中心表現（中）としてもっとも多く、6例ある。Ⅱ.事物中心表現（日）→動作主中心表現（中）は2例である。日中語間の名詞のランキングの有無がⅠやⅡという現象を生んでいると考えられる。今後はより詳しくその現象の生じる意味的な理由、条件を考察、研究していく必要がある。

『向』→《向》についてはⅠ、Ⅱ合計41例と今回、調べた4作品ではもっとも多い用例数である。その理由としては『向』の身体部分を含む表現自体が他の3作品より多いこと、Ⅰ、Ⅱを多用し、動作主中心表現（日）をそのまま動作主中心表現（中）にし、事物中心表現（日）をそのまま事物中心表現（中）にするという直訳（日→中）が他の3作品より

非常に少ないことなどが考えられるが、実際に調べてみないと確かなことは言えない。身体部分を含む表現のうち、直訳（日→中）になる場合とⅠ、Ⅱになる場合（大きくは転換（日→中）に含まれる）については次の4で少し言及したいと思う。

『ホ』→《无家》のⅠ、Ⅱが少ないのは直訳（日→中）の多用によると考えられるが、このことについても4で少し言及したい。

#### 4 その他

表現には身体部分を含む表現と身体部分を含まない表現があり、前者より後者の方がずっと多いのは当然のことである。身体部分を含む表現のうちには、直訳（日→中）されるもの、意識（日→中）されるものと本稿で扱った（転換（日→中）のうちの）Ⅰ．動作主中心表現（日）→事物中心表現（中）、Ⅱ．事物中心表現（日）→動作主中心表現（中）などがある。身体部分を含む表現を扱ったのはⅠ、Ⅱが顕著に現れるからである。

以下、身体部分を含む表現のうち①直訳（日→中）②意識（日→中）③その他④Ⅰ、Ⅱの比率について『悪意』→《恶意》、『ホ』→《无家》の2作品について考察し（前者は一般的で、後者は直訳（日→中）多様という特徴があるので選択した）、おおよその比率について把握してみたいと思う。（『向』→《向》は特殊的であり、『ノル森』→《挪威》は『悪意』→《恶意》で代替できるような一般性があるので選択しなかった。）

『悪意』→《恶意》の身体部分を含む表現の比率について。①直訳（日→中）は85例（85/161＝52.8%）②意識（日→中）は51例であった。また③その他として不訳（訳出されない）4例、非使役（日）→使役（中）1例、誤訳2例、計7例が存在した。④Ⅰ、Ⅱは6例である。①直訳（日→中）の例：「日高は口をつぐんだ。」（『悪意』p.19）→“日高赶紧闭上了嘴。”（《恶意》p.12）。②意識（日→中）の例：「藤尾があの子に目をつけてたのは知ってましたけどね。」（『悪意』p.298）→“我只知道藤尾一直在注意那个女生。”（《恶意》p.218）。③その他の不訳、誤訳は省略して非使役（日）→使役（中）の例を挙げる。「その時に私は背中がぞくりとしましたよ。」（『悪意』p.334）→“～，让我的背脊一阵发凉。”（《恶意》p.247）。①～③を合計すると、143例、④Ⅰ、Ⅱは18例で①～④の合計は161例であるから、④の全体に占める率は18/161＝11.2%である。

『ホ』→《无家》の身体部分を含む表現の比率について：①直訳（日→中）は82例（82/103＝79.6%）、②意識（日→中）は13例、③その他として不訳1例、受身（日）→非受身（中）、受身（日）→使役（中）が各1例、合計全体で3例が存在した。④Ⅰ、Ⅱは5例である。①直訳（日→中）の例：「（父は）家の中では無口で、口を開けば怒っていた。」（『ホ』p.76）→“他平时在家中沉默寡言，一开口就是骂人。”（《无家》p.78）。②意識（日→中）の例：「お



父さんはそれを告げると足早にどこかへ去っていってしまったので、～」（『ホ』p.7）→“爸爸只对我们这样说完之后，就三步并作两步不知道上哪儿去了，～”（《无家》p.4）。③その他の不訳は省略して受身（日）→非受身（中）と受身（日）→使役（中）の例を以下に挙げる。「～、家に帰ってお兄ちゃんに頭を下げられた。」（『ホ』p.118）→“～，哥哥很认真地低头拜托我。”（《无家》p.120）、「～動き回った後の育ち盛りの僕のお腹は満たされなかった。」（『ホ』pp.142-143）→“～，却依旧没有办法让正值发育旺盛期的我在剧烈运动后填饱肚子。”（《无家》p.147）。

①～③を合計すると 98 例、④Ⅰ、Ⅱは 5 例で①～④の合計は 103 例であるから**④の全体に占める率は 4.9%**である。3.5 3 のまとめで述べた『ホ』→《无家》の直訳（日→中）の多用が④Ⅰ、Ⅱの少なさの理由であることは立証されたと考えられる。『ホ』が自らの「ホームレス中学生」としての体験を一人称形式で述べた作品であることが『悪意』などの小説とは異なり、独白的、直接的表現が多く、それが直訳（日→中）の多用につながったと考えられる。

表現には身体部分を含む表現と身体部分を含まない表現がある（既述）が、前者は表現を具体的なものとし、小説などでは臨場感を盛り上げる作用がある。中国語では身体部分を提題化するⅠが定型化、固定化したのではないかと現在までの考察を通じて考える次第である。

## 5 結語

以上、動作主中心表現と事物中心表現—身体部分を含む表現について一日中対照表現論（日→中）—と題して、考察を行ってきた。大きくは転換（日→中）に含まれるものを扱った。4 その他 で述べたように、身体部分を含む表現の中で 90%以上は直訳（日→中）や意識（日→中）によって表現されるのであるから、Ⅰ.動作主中心表現（日）→事物中心表現（中）、Ⅱ.事物中心表現（日）→動作主中心表現（中）は主要なものではなく、少数の部類の、転換（日→中）に含まれる表現である。受身文にたとえて言えば、「自己称揚の受身文」のような少数の部類のものである。しかし、日本語表現が一般的に「なる」表現が多く、中国語表現が「する」表現が多いと考えられ、「なる」表現（日）→「する」表現（中）が一般的と考えられている中で、身体部分を含む表現についてはⅠ.動作主中心表現（日）→事物中心表現（中）がⅡ.事物中心表現（日）→動作主中心表現（中）より圧倒的に多い（今回調べた結果では、全体 76 例中、67 例がⅠ（88.2%）、9 例がⅡ（11.8%）であった。）ということが言えることがわかった。主要なものとならないもの（副次的なもの、少数のもの、例外的なもの等）を考える際の一つの類型例としての意義を本研究が持っているこ

とを最後に付言しておきたい。

〔付記〕 本稿は日中対照言語学会第35回大会（2016年度冬季大会）（2016年12月25日於大阪）で発表した内容に基づいて作成したものであることを付言しておく。

〔注〕

- (1) 藤田昌志（2007）pp.97-98
- (2) 藤田昌志（2007）pp.97-98
- (3) 藤田昌志（2007）pp.97-99
- (4) 奥田（1977）p.81
- (5) 奥田（1977）pp.93-94
- (6) 奥田（1977）p.89
- (7) 文学表現は普通の日本語（会話）表現から見たら marked なものであることもある。文学表現は日本語（会話）表現を忌避することがある。
- (8) 張麟声（2001）p.123

〔引用文献・参考文献〕

- (1) 藤田昌志（2007）『日中対照表現論—付:中国語を母語とする日本語学習者の誤用について—』白帝社
- (2) 奥田寛（1977）『中国人の非言語コミュニケーション』東方書店
- (3) 張麟声（2001）『日本語教育のための誤用分析—中国語話者の母語干渉 20 例—』スリーエーネットワーク

〔用例採取書目一覧〕

- (1) 東野圭吾（2001）『悪意』講談社 講談社文庫
- (2) 姜美蓮（2001）《悪意》南海出版公司
- (3) 道尾秀介（平成 21）『向日葵の咲かない夏』（＝『向』）新潮社
- (4) 王彤彤译（2009）《向日葵不开的夏天》（＝《向》）新星出版社
- (5) 村上春樹（2004）『ノルウェイの森』（上）（下）（＝『ノル』（上）（下））講談社 講談社文庫
- (6) 林少华译（2009）《挪威的森林》上海译文出版社
- (7) 田村裕（2007）『ホームレス中学生』（＝『ホ』）
- (8) 吴季花译（2009）《无家可归的中学生》（＝《无家》）